

『レジデントのための血液診療の鉄則』

岡田 定(編著), 樋口 敬和, 森 慎一郎(著)

[評者] 埼玉医科大総合医療センター教授/診療科長・血液内科 木崎昌弘

このたび、聖路加国際病院血液内科部長の岡田定先生を中心に、同病院のスタッフである樋口敬和先生、森慎一郎先生により、レジデントおよび血液内科医を対象とした本書が医学書院より上梓された。本書を拝見してまず感じたのは「よく練られた内容で、読者のことを真っ先に考えたよくできた本だなあ」ということである。さすがに臨床経験が豊富で、場数を踏んでいる3人が書かれただけのことはあると感じ入った。

われわれ血液内科(小児科)医は、実際の診療の現場では生命に直結する疾患を扱うことも多く、常に適切かつ迅速な判断を求められている。その上で特に造血器腫瘍の治療に関しては、化学療法や造血幹細胞移植のみならず、分子標的治療薬や抗体医薬などの新しい薬剤を用いた治療法をいかに用いるのかについても適切に選択しなくてはならない。そのためには、多くの疾患を経験するとともに、常に最新の病態解析研究や治療薬の臨床試験のデータ、ガイドラインなどを頭に入れておく必要があるが、日々忙しいレジデントや血液内科(小児科)医は時間がないのも事実である。これらの知識を取得するためには、多忙な医師のことを考えたテキストが必要であるが、本書は「かゆいところに手が届くように」多忙な医師の立場に立って書かれた好書である。

本書は、病棟診療と外来診療、さらには救急の現場で扱う頻度の高い血液疾患を、実際に患者を診療しているかのようなスタイルで統一して書かれている。当然ではあるが、病棟に入院してくる大多数の患者は診断が既についているが、外来では診断から始めなくてはならない。本書では、そのような実態に即して、病棟編では血液疾患の各論の形で主要な

血液疾患を、一般外来編や救急外来編では診断学の形でよく遭遇する症候を中心に記載されていることは、血液診療の現場を知り尽くした著者らの慧眼である。しかも病棟編では、各疾患について、実際のケースをもとにQ&Aの形で診断、鑑別、予後、治療を系統立ててどのように考えて診療を進めていくべきかを中心に記載されているところなどは、従来の医学書の形式とは全く違う。現場の医師の立場を考えた優れたテキストだと思う。外来編でも症候から、どのように鑑別して確定診断を導くかが理論的に学べるようになっていいる。コラム形式の「ココがpoint」や「もっと知りたい」もよくできており、長年の経験に基づく診療のポイントや最新の情報が素早くわかるように工夫されている。そして、何よりも冒頭の箇条書きに書かれた「鉄則」を読むだけで、何かその疾患や症候をすべてわかったような気にさせてくれる。さらに親切にも終わりには「最終チェック」ができるようになっており、ここまで読めば完璧である。この課程が簡潔な文章や箇条書きで本当にわかりやすく記載されている。

評者自身多くの書籍の出版に関わっているが、このように読者の立場に立って書かれ、しかも系統的に理解しやすく書かれている書籍に遭遇することは少ない。これも、岡田先生を中心とした聖路加病院血液内科の診療レベルの高さを示すとともに、常に若い医師をどのように実践的な医師に育てていくかを考えた教育レベルの高さを物語っているものと思われる。忙しい臨床の現場に立つ医師には常に座右において活用していただきたい書籍である。

● B5/ 頁 336/2014 年 / 本体 4,200 円 + 税

[ISBN978-4-260-01966-8] 医学書院刊